

## 国語教育の現状の一断面

——白瀬浩司氏『読み』のたちあがる場をめざして——

加藤 昌 孝

はじめに

高校の国語教育の現場には、今二つの〈切り捨て〉状況がある。一つは受験を唯一自己目的化した学校にみられるもの、もう一つは教育困難校におけるものである。いずれも国語の授業は、カリキュラムの中で「国語Ⅰ」のみが設定され、高校における国語教育は、高校一年生で〈終息〉してしまうのである。これは現行「指導要領」の、国語Ⅰのみを「すべての生徒に履修させるもの」に依拠した措置である。法的には認められている〈切り捨て〉ではあるが、一方、子どもの「最善の利益」を保障しなければならない国や学校や教師は、これでもいいのであろうかと思わざるを得ない。受験を自己目的化した学校や教育困難校の国語〈切り捨て〉状況に比して、

それでは普通校の国語教育はどのような現状にあるのだろうか。

「読む・書く・話す・聞く」が国語科の基本的な指導領域であることは自明のことである。が、普通校でも、〈読まない〉〈書かない〉子どもや生徒が教室にあふれているのが実態である。〈皮相なおしゃべり〉が氾濫し心を閉塞した生徒を前にして、教師は悪戦苦闘を強いられている。そしてマンネリ化した授業が繰り返り上げられているのが日常的風景である。

一

最近、国語教育の実践的研究の書物を二つ手にした。白瀬浩司氏のもの<sup>③</sup>と児玉忠氏のもの<sup>④</sup>である。白瀬氏は「読み」に、児玉氏は「表現」にと指導の力点の方向性は異なるが、いずれも綿密な指導

過程に基づきながら、今日的な生徒の内実に寄り添いながら、生徒の多様な「読み」や豊かな「表現」を引き出すという精神的な取り組みである。「自己」と「他者」の相対化を構想する実践である。白瀬氏は「小説」、児玉氏は「短詩型文学」と、教室で扱った教材には違いがある。が、いずれも、生徒の「声」や「意見」、生徒の書いた作品を教材化し交流し合うという点で共通している。その交流を通して生徒の閉塞した心を開こうとしている。児玉氏はその目的について「それぞれ（生徒）の表現を読みあって《他者が固有の存在者》であることを互いに認めあう」と記している。表現の授業を通じて、今日弧立化し閉塞状況にあるといわれている生徒を励まし、教室を他者理解の場として創出しようとしているのである。生徒作品が掲載された「文集」を「食い入るように読み、クラスメートの文章に感心したり、驚いたり」の反応を示す生徒から、他者を理解し自己を見つめようとする姿をとらえることができる。少なくとも《読まない》《書かない》生徒の姿は見い出せない。

二

「読み」から「表現」へとという構想を抱いて展開されたのが白瀬氏の実践である。教科書教材とともに「投げ込み」教材を配しながらの実践である。

白瀬氏は教室の「読み」の行為を、「生徒たちが作品を読み、自身の読みを表明（表現）する過程、さらには生徒同士の読みや教師のそれとがせめぎ合いつつ作品の主題を紡ぎ出していく過程を含めた意味」とする。そして「国語教室はその一つ一つの過程を保障していくことのでき場でありたい」と願う。ここに、白瀬氏の授業実践に対する基本的なスタンスがある。

日本文学協会・国語教育部会の先輩諸氏が提起する新しい教材による《多様な読み》の実践<sup>⑤</sup>に導かれながら、氏もまた新しい教材を教室に持ち込み実践を展開する。

氏の著書を中心をなすものは、新しい教材（自主教材）を用いての実践であろう。それは、「第四章《山田詠美》を教室へ」「第五章作品の読解から表現へ」「第六章 私の指標」である。

(1) 一時間一枚のプリントで授業

氏の「第四章」・「第五章」・「第六章」の実践は現代作家の小説を自主教材化して取り組まれたものである。<sup>⑥</sup>氏が自主教材として用いた作品は、第四章山田詠美『風葬の教室』・『蟬』、第五章鎌田敏夫『会いたい』、第六章清水義範『トンネル』である。

これらの作品を授業で読む場合、氏は、作品を原則として一時間一枚（B4）のプリントにして教室に持ち込む。『風葬の教室』では十二枚、『会いたい』は十枚、『トンネル』は九枚である。煩瑣な

事務や各種の会議で多忙を極める現場の日常にあって、ワープロを打ち、プリント教材を作り、教材分析をする作業は並大抵の努力ではできない。「検定教科書」と「指導書」を絶対化し、神聖化して、多忙な日常に流され授業展開している教師の多い中で希有な存在であり貴重な実践であるといえよう。氏のこの仕掛けと努力は現実する。

生徒は、①「……プリントを配られて読むたびに、はやく次のプリントを読みたいと思った……」、②「ぼくは小さい字がきらいなので小説など読まないが、授業でやったみたいにならず読むとどろんどろん先が読みたくなるものだ。小説とか絵がないものでもおもしろいもんやと思いました。」、③「一枚目を読むとすぐに二枚目を読みたくなり、……続きは今度の時間という時などは、気になって気になって仕方ありません。でもその反面、次の国語の授業が楽しみになるので……」（傍線は筆者）という反応を示している。特に、②の「小さい字がきらいなので小説など（読まない）」生徒が「どろんどろん先が読みたくなる」とし、③の生徒は「次の国語の授業が楽しみになる」と歓迎の意を表明している。氏の授業実践に対するこの生徒の評価は注目値する。

授業の最後に「自分の実感や体験に基づく現実認識の中で作品と出合い、その虚構世界をくぐり抜け」た生徒の本音が語られ出す。

氏は、生徒の「誤読」を認め、生徒の「多様な読み」を激励する。紙数の都合で生徒の「読み取った（表現した）」作品を紹介できないのが残念である。

なお、生徒の「読みたい」「次の国語の授業が楽しみ」とする「一時間一枚プリント」で展開した氏の授業方法は、「一読総合法」で授業実践する児童言語研究会が重要視する「順次性」<sup>⑦</sup>に着目し、発展したものと見えそうである。

(2) 「読み」から「創作」へ

第五章「会いたい」の授業後、氏は、感想文ではなく生徒に「創作」<sup>⑧</sup>することを求めている。第二章で紹介されている、かつおきんやの『鈴』、芥川龍之介の『羅生門』の「続編を書く」の授業実践の延長線上の実践と考えられるが、生徒に「歌物語」を書いてもらうという取り組みである。「歌物語」の創作に取り組むにあたって、『伊勢物語』や『万葉集』の「歌と詞書」を紹介するなどして、現代の「歌物語」創作を仕組む。そして生徒に「自分の好きな歌を一曲」選ばせ、その「歌詞をコピーまたは書き写してくること」や自分で「題名」を決めることを課題とし、字数も「七百字以上千二百字以内」に設定する。一方、生徒の手に（現代の「歌物語」を書く！ 構想メモ）を渡す。その内容は、①選んだ歌／②歌手／③作詞者・作曲者・編曲者／④歌詞（コピーを張り付けるか、書き写す

こと)／⑤登場人物(だれが、だれと)／⑥場面(いつ、どこで)／  
 ⑦事件(何をして、何が起きて)／⑧結末(どうなった)である。  
 こうして、仕組まれた「指導過程」に乗せられ、生徒はこれまでの  
 「専ら受信者としての享受」主体から「発信していく」主体に変化  
 する。いわば(書かない)生徒が、虚構という手段を得ることで、  
 (書き)出したのである。生徒の若い感性、豊かな想像力が生み出  
 した作品も本著に幾つか紹介されている。教育現場の「多忙さ」を  
 日常的に実感している一人として、生徒の初発感想を次の授業まで  
 にプリントして、教室に持ち込む氏の情熱にも感心させられる。

### 三 まとめ

児玉氏と白瀬氏の実践は、今日成立しにくいとされる国語教育の  
 授業も、必要な手立て(教材研究・授業計画・授業過程)がとられ  
 さえすれば見事に成立することを証明したものと見える(両者の実  
 践の背景にある新教材発掘のための日常的な努力を見逃してはなら  
 ない)。その確かな手応えを感じることができて嬉しい。

今、全国的に生徒の現実認識・問題意識に働きかけ、魂を揺さ振  
 る教材の重要性が指摘されている。生徒のそれに対応できる新しい  
 教材発掘が求められている。近現代の文学研究者からの支援は現場  
 の教師を励ましている。また現場から生徒の(読みの多様性)を励

ます授業や地域社会で働く人々の「聞き書き」を中心にした表現指  
 導も報告されている<sup>⑩</sup>。

「はじめに」に記した国語教育の二つの(切り捨て)状況をどう  
 克服していくのか、学ぶ機会さえ奪われた生徒の学習権をどう保障  
 していくのか。現代文さえ(読まない)(書かない)生徒に、言語  
 抵抗のある「古典」、「外国語」視する「古典」の教育をどう教室で  
 展開するのか。そのための教材の精選と配置は? その指導過程  
 は? 基本指導としての文法指導と文学の作品鑑賞・批評を統一的  
 に指導する方法論は?

国語教育を取り巻く現状は重く課題も多い。

(一九九七年五月、教育出版センター刊、A五版、二九八頁)

### 注

- ① 愛知の工業高校では、国語Iの「現代文」の領域だけを履修する。大  
 阪の私学では理系の大学受験の生徒のカリキュラムは、国語Iだけにな  
 っている。数学の問題文も理解できないと、校内で不満が出ているとい  
 う。「全国教研集会」や大阪私学の「研究集会」における席上口頭報告
- ② 高等学校学習指導要領の「第一章第三款各教科・科目の履修」
- ③ 白瀬浩司氏「(読み)のたちあがる場をめざして」
- ④ 児玉忠氏「高等学校文章表現の授業」(一九九七年四月、溪水社)
- ⑤ 例えば、深谷純一氏「(風葬の教室)(山田詠美)を教室で読む」(「日  
 本文学」第四二巻四号、一九九三年四月)

⑥ 氏の自主教材設定の留意点については、本書一八八頁から一八九頁の注9に三点にまとめられている。生徒とともに授業を創造していかうとする氏の姿勢がうかがわれる。

⑦ 田島伸夫氏（『国語教育・中学の文学』一九七六年、あゆみ出版）

⑧ 白瀬氏のこの授業の実践については「同志社国文学 第四十三号 一九九六年一月」に初出。その後本書に再録。

⑨ 田中実氏『小説の力——新しい作品論のために』——一九九六年、大修館書店）、「読みのアナーキーを超えて」（一九九七年、大修館）は、

長年文学研究と国語教育の接点を追求した教材論的作品研究の成果を発表したものである。

⑩ 丹藤博文氏『教室の中の読者たち』（一九九五年四月、学芸図書）

⑪ 下橋邦彦氏編『高校生は表現する』（一九九六年、東邦出版）

### 投稿規定

国文学会機関誌「同志社国文学」は、会員諸氏の研究発表の場でありますから、進んでご投稿ください。枚数は四百字詰三十枚以内。第四十九号の締切は一九九八年九月末日、第五十号の締切は十二月十日厳守。ただし、掲載論文には限度がありますので、論文の採択は編集委員会に一任してください。採否の問合せには応じられません。